# 旅好きな磯丸

歌を詠む多くの人が旅好きであったように、磯丸もまた旅が大好きでした。渥美半島の対岸にある知多半島や三河の各地をはじめ、新城の山奥や浜松、長野といった地域（三遠南信地域）によく訪れ、遠くは京都や伊勢、尾張、江戸などといった場所にも訪れています。また、田原の殿様に呼び出されて、お城で一緒に月見をしながら歌を詠んだり、同じ時代に生きた渡辺崋山とも天保４年（1833）に会っていたりしたことが、崋山の残した記録からわかっています。

## 磯丸と作手

年をとった磯丸は、伊良湖の暑い夏を避けて、涼しい奥三河の高原で夏を過ごすことが多くなりました。現在の新城市作手地区や岡崎市額田地区には、そんな磯丸のために小さな家が建てられました。中でも作手には、磯丸のために、故郷の氏神さまである伊良湖明神をおまつりした神社が建てられました。さらに磯丸が亡くなった後には、磯丸をまつった神社が建てられたほどでした。それでは、なぜ磯丸がこれほどまでに親しまれ愛されたのでしょうか。それは、磯丸がこの地区で詠んだ一つのまじない歌がきっかけでした。その歌とは、「みつぎものつくる田畑につく虫をはらへ水穂の国つ神風」です。かつてこの里で、悪い虫たちが大発生し、大切に育ててきた作物が全部だめになりそうなことがありました。そこへたまたま旅の途中で通りかかった磯丸がやってきて、そのことを聞き、この歌を詠んだところ、なんと不思議なことに悪い虫たちがいなくなったのです。それ以来、この里では磯丸を神様のようにもてなしたということです。

このようなお話は、旅好きであった磯丸が訪れた先々でその土地の人たちに頼まれて「まじない歌」を詠み、人々を助けたという逸話として残されています。